インクルーシブ体育の現状と課題について

塩見　泰弘　（生涯スポーツ学科　地域スポーツコース）
指導教員　金田　安正

キーワード：インクルーシブ体育．障がい者スポーツ．能力差

１．緒言

本研究では，インクルーシブ体育について，歴史，また日本ではどのような指導方法，内容で今現在どのような状況にあるのか，その現状から見えてくる今後の課題，その課題に対してのより良い改善方法を障がい者教育の歴史をふまえて考察していく．

２．研究方法

今回，インクルーシブ教育，体育，また障がい者スポーツなどが関係している文献を主に調査し研究を行った．

３．結果・考察

（１）インクルーシブ体育

障がいのある子とない子が同じ集団の中で行う体育のことをインクルーシブ体育と言う．これまでは，別々に体育の授業を受けるのが一般的だったが，いろいろと問題が生じ，その反省にもとづきインクルーシブ体育が始まった．

子ども同士が何を理解し合い，どのように工夫し合い，協力し合えばよいかを考え，それを行動に移す力を身につけることが目的である．インクルーシブ体育はその目的を強く意識した体育である．

（２）現状

進めていく中で第一の壁といわれているのが「能力差」である．障がいのある子とない子の運動能力を平均値で比較してみると，障がいのある子どもの運動能力は低い状態にある．しかし，障がいのある子の中にも運動能力が高い子もいる．障がいのない子の中にも運動能力が低い子もいる．障がいの有無にかかわらず「能力差」は生じるものである．

指導者もまた，教えにくさから「能力差」を問題視している．障がいのある子に対しての指導経験不足，知識不足，また学校内の施設・設備の不十分さ，などが問題としてあげられている．

（３）課題

体育では体をとおして，失敗や成功や工夫や努力を経験する．その経験をめぐって喜怒哀楽の感情が起こり，時には他人との違いに悩み，時には同じ気持ちになったことに喜ぶ．失敗や成功をめぐって，情報交換があり，アドバイスや激励があり，叱責があり，賞賛がある．そのような様々な試行錯誤によって，子どもたちは自分たちの問題を自分たちで解決していく．その姿勢こそがインクルーシブ体育において学んでほしいことであり，今後の課題でもある．

４．まとめ

インクルーシブ体育を行う中で，障がいのない子の指導内容に合わせることによる，レベルの低下が問題視されている．

運動能力・体力の向上という面では，その展開に配慮が相当必要となってくるが互いに助け合い，協力し合い，励まし合える，共感できる，などの点で様々なことを学ぶことができる良い機会である．そのことにより，子どもたちの「障がいに対する壁」が少しずつだが無くなり，今後のインクルーシブ体育をさらに良くなっていくものと考える．

参考文献

市村出版（2007）：インクルーシブ体育の創造 「共に生きる」授業構成の考え方と実践